

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370962

研究課題名(和文) アジア太平洋戦争の精神的後遺症に関する研究 「戦後補償」関連公文書を主資料として

研究課題名(英文) Research on Traumatic Aftermath of the Asia-Pacific War in Japan: Focusing on the Official Documents Concerning the Postwar Compensation

研究代表者

北村 毅 (Kitamura, Tsuyoshi)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00454116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に「戦後補償」関連の公文書を基本資料として、沖縄を基点にアジア太平洋戦争の精神的後遺症について医療人類学的に検証し、戦争体験の長期的な影響を社会や制度との関わりのもとで考察した。一連の研究成果を通して、戦争の後遺症という問題を臨床や福祉の現場のアクチュアルな課題として提起し、その世代を超えた派生的影響に着目しつつ、戦争被害の心理的側面の社会的・文化的特性を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, I conducted a medical anthropological review of official documents concerning the postwar compensation to examine the psychological consequences of the Asia-Pacific War, focusing on Okinawa. I further analyzed the long-term impacts of the war experience in the context of society and institution. My research results showed that the aftereffects of the war are an actual issue affecting the clinical and welfare fields. The results also clarified the social and cultural characteristics of psychological war damages, focusing on the successive impacts on subsequent generations.

研究分野：文化人類学

キーワード：医療人類学 アジア太平洋戦争 戦争体験 心理的影響 戦後補償

## 1. 研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争の心理的影響や精神的後遺症をめぐることは、これまで主に精神医学、心理学などの分野で実証的研究が試みられてきた。しかし、戦争という「国民的体験」がもたらした被害の広範さや甚大さを考慮に入れると、研究蓄積はあまりに少なく、研究対象も限られてきたといわざるをえない。

先行研究を概観すると、(1)「戦争神経症」などと診断された元兵士を対象とした研究、(2)広島と長崎で被爆した原爆被害者を対象とした研究の大きく二つに大別される。(1)は、戦地で「戦争神経症」を発症し、国府台陸軍病院に「収容」された経歴がある元兵士を症例とした研究がほとんどであり、目黒克己「20年後の予後調査からみた戦争神経症」(1966)や浅井利勇『うずもれた大戦の犠牲者』(1993)などの精神科医による研究、「精神障害兵士」の史的研究を試みた清水寛『日本帝国陸軍と精神障害兵士』(2006)などが挙げられる。(2)は、アメリカの精神科医 Robert Lifton による『死の内の生命』(1967)を嚆矢として、被爆者の「心の傷」について社会的に検証した濱谷正晴『原爆体験』(2005)、被爆者の「心の被害」について精神科医の立場から論じた中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』(2007)、三世代にわたる被爆者の心理的研究を試みた澤田愛子『原爆被爆者三世代の証言』(2011)などが挙げられる。

数十万の民間人が地上戦に巻き込まれた沖縄戦については、近年まで学術的検討の俎上に上ることはほとんどなかった。保健師としての面接調査に基づく當山富士子「本島南部における沖縄戦の爪跡」(1984)を嚆矢として、沖縄戦研究の文脈で元兵士や沖縄住民の「戦争トラウマ」について社会的に検証した保坂廣志「沖縄戦と心の傷(トラウマ)とその回復」(2002)、戦争の心理的影響を臨床心理学的に分析した吉川麻衣子「沖縄県の戦争体験者のいま」(2011)、「トラウマ診療」の臨床事例に基づく蟻塚亮二『沖縄戦と心の傷』(2014)などの研究が挙げられる。

以上の研究が扱う事例は、国府台陸軍病院の症例、精神科医や保健師の臨床知見、戦争体験者へのインタビュー調査、戦争体験記録の中に断片的に残された関連記述のいずれかである。しかも、その研究対象は、国府台陸軍病院の精神障害患者と広島・長崎の被爆者に偏っており、アジア太平洋戦争の精神的後遺症の全体像を把握するには充分ではない。戦争の心理的影響を戦前・戦中・戦後の個々の生活史を把握した上で時間軸に沿って検証するためには、資料的にはなほだ不十分な状況にあった。

## 2. 研究の目的

本研究では、次項「研究の方法」で述べる

新たな資料調査と聞き取り調査の結果を踏まえた上で、アジア太平洋戦争の精神的後遺症に関する実証的研究を展開する。地上戦が展開された沖縄を基点にアジア太平洋戦争の精神的後遺症について、個々人の戦前・戦中・戦後の生活史を把握した上で時間軸に沿って医療人類学的に検証し、戦争体験の長期的な影響を社会や制度との関わりのもとで明らかにすることが、本研究課題の最終的な目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、主に「戦後補償」関連の資料調査と聞き取り調査に基づき、沖縄戦を基点にアジア太平洋戦争の精神的後遺症について医療人類学的に検証した。基本資料となるのは、「戦後補償」関連の公文書、精神衛生(保健)関連の行政文書、戦争体験記録などである。

これらの一次資料について、沖縄を中心とした全国各地の公文書館・都道府県庁・図書館等で閲覧し、その中から精神障害に関する診断書・症状経過書・申請事項・証言記述を抽出して基本資料とした。この文書は元軍人・軍属、民間人(「戦闘参加者」)の身体的・精神的被害が国家に対して申告された資料であり、そこに含まれた診断書や症状経過書(図1参照)などから戦争の精神的後遺症の詳細を知ることができる。

さらに、沖縄において、戦争の精神的被害を申告する戦争体験者やその家族、ならびに米軍統治下の精神保健を担った精神医療従事者への聞き取り調査を実施した。

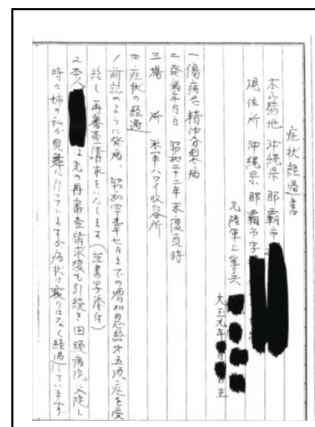


図1：症状経過書の一例

なお、本研究では、個人情報を含む公文書を扱ったが、公文書館で収集する資料に関しては、マスキング処理がされており、個人識別情報は一切含まれていない。これら以外のマスキング処理がされていない資料を扱う場合は、匿名化や個人の特定が不可能となる処理を施して、プライバシーに嚴重なる配慮をもって行った。

また、オーラル資料の研究利用に際しては、

匿名を原則とし、該当箇所をインフォーマントに確認してもらい、発表の許諾を得た。

#### 4. 研究成果

##### (1) 本研究の主な成果

本研究を通して得られた文書データや聞き取りデータは、未整理のものも含め膨大な量に及ぶため、まだまとめ切れていないが、ここでは以下の3点を現状の研究成果として挙げておきたい。

##### 戦争被害の社会的・文化的特性

戦後の沖縄では、収容所から解放されて、新たな生活を歩み始めても、遷延的に心身の不調に悩まされ続ける人や、戦後数年ないし数十年後に突如として精神疾患を発症する人が多かったが、本研究では、「戦後補償」関連の公文書に含まれた診断書や症状経過書から当該事例を抽出し、検証した。さらに、アルコール依存や自殺、「幽霊」の目撃体験、サバイバース・ギルトなどの問題についても分析を進めた。

その上で、戦争被害の心理的側面を検証するにおいては、個々人の病理の問題として論じるだけでは充分でなく、その病理を生み出す社会的な背景要因を考慮に入れる必要があることを指摘した。すなわち、戦争の精神的後遺症を見定めるためには、病因や「トラウマ」の在処をたぐり寄せようとするだけでなく、戦争被害の社会的・文化的特性を析出することこそが重要になってくることを今後の論点として提示した。

##### 帰還兵の心理と戦友会の機能

戦後、多くの帰還兵が「戦友会」と呼ばれる集団に所属し、戦友会における交誼を軸として、戦跡巡拝、慰霊碑建立、慰霊祭、遺骨収集などの慰霊実践を行ってきた。戦友会の一般に流布しているイメージは、戦場での苦楽を共にした旧軍人の閉鎖的な親睦団体であろうが、多くの場合、戦友会は、戦死者の遺族や帰還兵の家族にまでメンバーシップを拡張した「擬制的親族関係」(fictive kinship)としての相貌を持つ。

本研究では、そのような擬制的親族集団において、帰還兵=生き残り(サバイバー)が、戦死者やその遺族、さらに、自らの家族なども含む「戦友」との関係を育み、戦争体験について語り、記憶し、共有してきた心理的プロセスについて検証した。その上で、戦友会における人間関係が加害の記憶を互いに慰撫し合う中で、その記憶を戦後社会から隔離させ、自閉させた心理的機制について指摘した。

##### 戦争が家族に及ぼした影響

戦後、アジア太平洋戦争の戦地から復員した日本軍兵士は数百万人に上るが、彼らの戦争体験が記録に残されることはあっても復員後の生活史に関心が向けられることは少ない。米国では、多くの帰還兵が、悪夢、フラッシュバック、パニック障害、アルコール依存症などに苦しみ、怒りや暴力の衝動を抑制できず、家族関係にトラブルを抱えていることが知られているが、こうした戦争の影響は、犯罪、DV、虐待といったかたちで社会に底流し、さらなる暴力の連鎖を生み出すこともある。

本研究では、このような戦争の派生的被害について、帰還兵とその家族の具体的事例を通して検証した。とりわけ、2015年11月に開催された日本子ども虐待防止学会のいがた大会の大会企画シンポジウム「戦争体験と子ども虐待～トラウマの世代間連鎖から考える」で報告し、問題意識を共有する研究者・臨床家・メディア関係者との交流を通して知見を広げることができたことは大きな成果であった。

上記のシンポジウムのテーマともなった「戦争体験と子ども虐待」については、長い間臨床や福祉の現場のアクチュアルな課題として認識されてこなかったが、本研究では、戦争による加害・被害の結果として単線的に子ども虐待を捉えるのではなく、強者が弱者を濫用する社会構造によって戦争がもたらされ、戦争によって強者が弱者を濫用する社会構造が再生産される悪循環の中に子ども虐待が現れるといった視点から、実際の家族の事例を検証した。

すなわち、戦争と虐待の関係を因果関係だけではなく相関関係として捉え、戦争は虐待の原因であるだけではなく結果でもあるという論点を提示しつつ、戦争体験から延長される家庭内の暴力が臨床的な問題であると同時に、歴史的・社会的に構築された問題として幅広く認識されるべきであることを指摘した。

また関連して、2016年11月7日に大阪大学にて「戦争と優生思想 ジェノサイドの加害者であった父と被害者である私」と題する安積遊歩氏の講演会を開催し、家族の中の戦争の記憶について語っていただき、重要な知見を得ることができた。

##### (2) 本研究の社会的意義

近年、「トラウマ」という概念の広がりとともに、「心のケア」に対する社会的関心が高まっている。戦争などの人災や自然災害によって壊滅的な被害がもたらされた(ている)地域に住む人々の精神的被害は長期化・複雑化する傾向にあり、そこからの回復に向けた支援のあり方を考えるためにも、基礎研究の拡充は世界規模の課題である。とりわけ、東日本大震災を経た今日、日本にとって喫緊

の課題といっても過言ではない。本研究の調査結果は、そのために広く活用・援用される貴重な知見となる。

アジア太平洋戦争の精神的後遺症や心理的影響の具体相を明らかにする本研究は、単に過去の戦争の事例研究ではなく、国内外の多くの研究を参照しながら、同様の問題を抱える国内外の他地域との比較を念頭に置きつつ進められた。かかる精神的被害から人々が回復するためにどのような方策をとるのが有効なのかを考える上で、戦争という最大級の人災が人々の心に与えてきた長期的影響について社会や制度との関わりのもとで明らかにしようとする本研究の学術的・社会的意義は大きいといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

北村 毅、戦争と虐待に関わる一考察、  
子どもの虐待とネグレクト、査読無、18(2)、  
2016、207-213

北村 毅、「沖縄の精神衛生実態調査」の  
医療人類学的研究 疫学調査から歴史  
経験を読み解く、琉球・沖縄研究、査読有、  
5、2017年6月刊行予定

[学会発表](計4件)

北村 毅、沖縄における軍事環境問題と  
心的後遺症、人文研アカデミー・連続セミ  
ナー(招待講演)、京都大学人文科学研究  
所、2014年6月12日

北村 毅、「戦友」とは誰か、川村邦光科  
研費研究会(招待講演)、大阪大学、2014  
年10月17日

北村 毅、「勝った戦争」と「負けた戦争」  
の記憶、第97回アジアセミナー(招待講  
演)、早稲田大学、2014年10月29日

北村 毅、戦争体験世代とその家族の戦  
後(大会企画シンポジウム「戦争体験と子  
ども虐待」)、日本子ども虐待防止学会第  
21回学術集会(招待講演)、新潟市朱鷺メ  
ッセ、2015年11月21日

[図書](計1件)

北村 毅 他、名護市役所、名護市史本編  
3、2016、662-675

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

北村 毅 (KITAMURA, Tsuyoshi)  
大阪大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：00454116